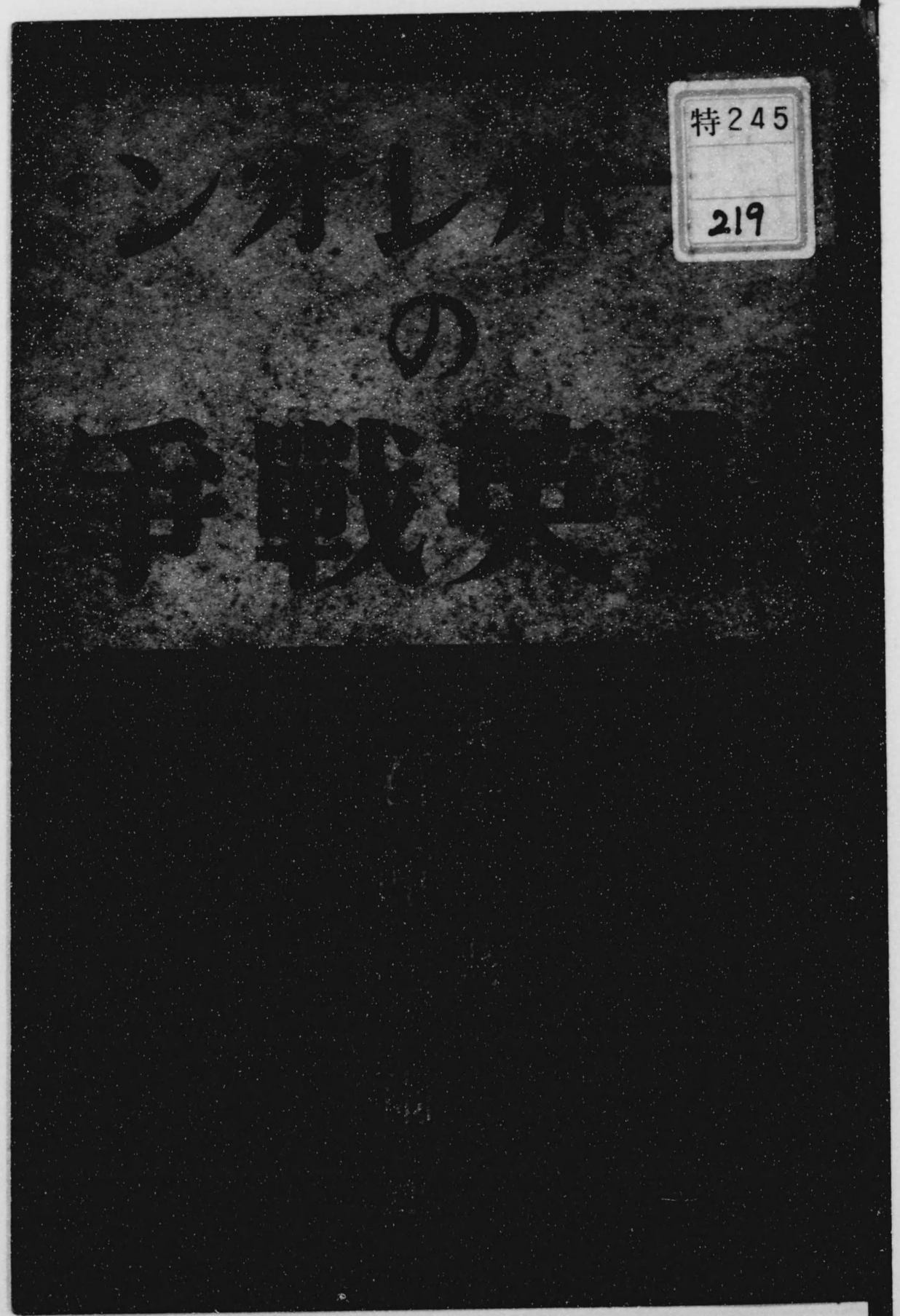
特245
219



0056829000

0056829-000

特２４５－２１９

ナポレオンの対英戦争に就いて

石原莞爾・著

東亜聯盟協会

２版
昭和１６

AJD

ナポレオンの爭戰英對

特245
219

陸軍中將
石原莞爾 述

特245
219

14

ナポレオンの對英戰爭に就いて

陸軍中將　石原莞爾

昭和六年
帝國大學

一

ナポレオンは云ふまでもなく十八世紀の持久戰爭からフランス革命の波に乘じて決戰々爭に軍事上の革命をした人でありまして、ナポレオンの最も得意なところは決戰々爭であります。世間の常識から云へば皆さんには割に興味が少いとも思はれます。なんとなれば決戰々爭は作戰が重點であり、作戰上に非常に興味が多いからであります。ところが持久戰爭といふものは、政治經濟がその重點になつてゐますから、皆さんには興味が多いのではないかと思ひます。

ナポレオンは大陸の各國に對する個々の戰爭では決戰々爭を巧みに運用したのであります。併しナポレオンの英國に對する戰は持久戰爭に終始したのであります、から、私はナポレオンの對英戰爭といふものは、持久戰爭時代に生活をし、持久戰爭のための戰爭計畫に重大なる貢獻をしてゐられる皆さんにとりましては、過去の歐洲大戰と共に、最も重大なる價値あるものと思ひます。

二

ヨーロッパ諸國の世界政策が開始せられまして最初に登場して來ましたのはラテン民族・ポルトガル・スペインで、遲れて立ち上つて來たのがオランダ・英國であります。英國は先づスペインの無敵艦隊を叩きつけオランダを屈服せしめまして、世界政策に非常に良い位置を占めました。がこの時フランスが登場して來まして、フランスと英國とは世界政策のために正面衝突の避くべからざる運命に陷つたのであります。

元來英國の政策といふものは、巧みに外國の力を利用することでありまして、フランスとの戰爭にも特に當時のドイツの諸聯邦が英國に巧みに利用せられたのであります。例へば或る學者は、カナダの運命といふものはプロイセンの擲彈兵によつて、決せられた——といつてをります。實に英國は七年戰爭の間にうまくドイツを混亂に陷れて、その間にカナダを取つてしまつたのであります。かくの如く英國がヨーロッパの諸國に巧妙に働きかけてフランスの邪魔をしましたから、ナポレオンの對英戰爭といふものは英國の司令部に對して已むを得ずヨーロッパ全部を敵にして戰はねばならなくなり、戰爭のスケールが從つて非常に大きくなつたのであります。フランス革命が始りまして數年後に大陸の諸國に遲れて英國はフランスと戰爭狀態に入り、十八世紀の末葉、十九世紀のはじめに一番大きな問題であつた世界爭覇戰といふ決戰の火蓋を切つたのであります。

革命政府の英國に對する戰爭方略と、ナポレオンの採つた戰爭方略とは大體同じでありまして、大きくみれば三つであります。

第一は、英國の殖民地を奪取すること。

第二は、直接英國に侵入し、英國を軍事的に屈服せしめること。

第三は、經濟戰であり、謂ふところの大陸封鎖であります。

この三つの方法をナポレオンも踏襲したのであります。で、一七九六年と七年のイタリー並にオーストリアに對する戰爭によつて、ナポレオンは一躍フランスの支配的地位に立つことになり、自然英國に對する戰爭の首腦的地位に押出されて來たのであ

ります。

それでナポレオンは、政略的事情もありましたらうが、最初に先づエヂプト遠征といふことを考へました。革命政府もナポレオンのフランスに於ける存在を嫌つた點もありましたらうし、又ナポレオンとしても仔細に英佛海峽を視察して英國侵入に就いての研究をした結果、これは差當り實行出來ないといふことをみたものでありますから、それでは英國の殖民地を奪取し、それを混亂に陷れようといふ方策を樹て、その一つとしてエヂプト遠征を提案し實行したのであります。

エヂプト遠征の目的は何であつたか？　といふことは歴史的にみて非常に大きな問題でありますが、私はナポレオンは大體二つのことを頭に畫いてをつたのではないかと思ひます。即ち巧みにエヂプトに行きこれを取つて英本國に大衝動を與へ、反面フランス國民の精神を昂揚してその勢を驅つて英國に侵入しようといふ考を持つてをつたのだと思ひます。

併し當時のナポレオンは申すまでもなく統領でもありません……差當り滿洲事變で

歸つて來た本庄大將といふところで、人氣のあつた大將に過ぎない。さう思ひ通りなことも出來ませんから、情勢によつてはエヂプトから印度までも攻め入つて自分の名譽心を滿足さすと共に英國を屈服させる大きな動機にしようといふやうな氣持を持つて征つたのではないか、と私は想像します。

ところが御承知の通り、巧みにネルソン艦隊を捲いて上陸したのでありますが、ちよつとした手落のためアレキサンドリアに近いアブキールでフランス艦隊は全面的悲運に際會したのであります。これは陸戰の方にのみ氣をとられてゐたナポレオンの千慮の一失でした。これで形勢が非常に惡化しまして、一番頼りにしてゐたトルコ迄が英國側について立つといふことになり、フランスとの連絡は益々困難になつて來ました。それからもう一つ幻滅を感じたのはナポレオンは深くエヂプトを研究してをつたのですが、エヂプトはナポレオンが思つたより遙かに經濟的價値が低かつたことがそれであります。それでナポレオンはエヂプトに孤立して相當困難に際會してゐる時に色々考へまして、エヂプトでは食糧物資も豐富ではなく、軍の長期間の駐屯にも種々

不便でありますから、逆に兵を率ゐて一七九九年の二月シリアに行つたのであります。併しこの計畫もヤッファに於ける攻城の不成功、サンジャン・ダークル要塞攻撃の不成功によつて結局失敗に終りましたので、ナポレオンは巧みに機會を摑へてフランス本國に遁げ歸つたのであります。

大體ナポレオンのエヂプト遠征は形の上からは失敗に終りましたけれども、ナポレオンの本國にゐることを恐れ煙たがつてゐた執政官達も、ナポレオンの不在中にイタリヤ戰爭に於て得たところのイタリヤやスキッツルの軍事占領後の成果が英國を中心とする對佛同盟の力によつて完全に破壞されてしまひましたので、奇蹟的に歸つて來たナポレオンはフランス國民に非常に歡迎されました。これがフランス國民を中心としてナポレオンが大活動をやつた一つの素地になつたのであります。フランスに歸つて來るやナポレオンは、アルプスを越えまして一八〇〇年にオーストリヤを徹底的に叩きつけ大人氣を博しまして政權をとり第一統領になるのであります。これで愈々ナポレオンは對英戰爭について良い位置についた譯であります

三

御承知の通りロシヤのパウル一世はナポレオンにすつかり惚込んでしまつてゐました。ナポレオンもロシヤの捕虜に非常に立派な服裝を與へて本國に送り返した爲め、ロシヤの方でも感激して兩國の間は良くなつて來ました。

當時英國が巧みにヨーロッパ諸國を捉へて利用してゐる點は今と同じで、皆知つてをります。それで英國の海上に於ける横暴に對して各國は大陸同盟・武裝中立同盟を再興したのであります。これが繼續されて行けば英國は非常に困難な狀態になつたのでありますが、形勢の不利を觀てとつた英國は一八〇一年デンマークのコペンハーゲンを攻擊するのであります。

利害關係から物を判斷するヨーロッパ諸國は總じて惡辣ですが、英國は歷史的にみて特にひどい。かうした方が自分のためになると決めると何でもやります。それで英國のコペンハーゲン攻擊によつてデンマークは非常に恐慌を來しました。又一方ナポ

レオンと親しかつたロシヤのパウル一世が暗殺されてしまひました。ロシヤのツアールといふものは暗殺される者が多いのでありますが、このパウル一世暗殺は英國の手が入つてゐるのであります。そんなことでとうとう武裝同盟は崩壞してしまひましたが、一方英國も永年の對佛戰爭で疲れてしまひましたからピット內閣が崩壞しました。その結果一八〇一年十月アミアンの和約になるのであります。

ナポレオンとしては絕對的に平和が必要であつたのであります。殖民地の再編成をやり海軍を建て直して、英國に對抗すべく努めましたから、一度は平和を欣んだ英國もこのナポレオンの意圖をみて、これは油斷ならぬ、と察しました。世界の情勢を優れた常識的考察によつて達觀する英國人でありますから流石にその眼は確かでありました。そして一八〇三年春に英佛間の平和は再び破れるのであります。

ナポレオンとしては戰をやりたくなく、やるぞやるぞといつて脅かしてゐたらどうにかやらずに濟むだらうといふ氣持でゐたのですが、とうとう引込みがつかなくなつて戰爭になつてしまつたのであります。

この一八〇三年からナポレオンの沒落まで對英戰爭は十年以上も繼續されたのであります。

ナポレオンは軍事的に優れてゐただけではなく、政治的にも亦非常に優れてゐまして、英國と戰爭が始まつて間もなく、皇帝の地位についたのでありますが、皇帝になつたナポレオンは全力をあげて經濟・政治の有ゆる方面から綜合的に英國壓迫の政策を執つたのであります。一番彼の考へたことは英國に侵入するといふことであります。戰爭になりますとナポレオンは沿岸の各造船所に命令して底の平らな船を澤山造らしたのであります。當時の船は主に帆で走つてゐたのでありますが、これは風のない時に困るので、之に乘じていざといふ時は櫂でドーヴアー海峽を漕ぎ渡つて英國に侵入すべく着想して、底の平らな船を造つたのであります。そしてその船をどんどん今のドーヴアー海峽のブーロニュ附近に集中し、精兵十萬を英佛海峽に持つて行き敵前上陸を稽古したのであります。

ドイツ海軍の或る優れた軍事通の書いたものをみますと、ドーヴアー海峽について

ナポレオンが考へてゐたやうな、風のない適當な天氣の日は年に數日間位はあるだらう、絶對に不可能なことではないが非常に難しい、と言つてをります。その他ナポレオンは大きな風船を飛ばして澤山兵隊を積んでゆくことや潜水艦をも考へてをります。

一八〇四年、蒸汽船を發明したフルトンがセーヌ河で蒸汽船の試驗をやつてをりますが、この時はとうとう成功しませんでした。若し蒸汽船が出來さへすれば、帆前船が立往生してゐる時にどんどんドーヴアー海峽を渡つて攻めて行くことが出來たのでありますから、ナポレオンにとつても英國にとつても運命が變つてゐたかも知れませんが、幸か不幸かその時はまだ蒸汽船は完成されず、その後一八〇七年にハドソン灣に於て成功をみたのであります。

ナポレオンは有ゆる智嚢を集めて新兵器の發明に苦心し、ドーヴアー海峽の數時間の支配權・制海權を得べく努力しました。實際ナポレオンはドーヴアー海峽を渡り英國に上陸出來たなら忽ちに英國を屈服し得る堅い自信を持つて居たのであります。

四

當時エヂプトのアブキールで殲滅されたフランス艦隊のうち殘存してゐた艦隊を、ツーロン艦隊司令官であつたラトウーシュ提督が爾來六年間鋭意再建に努めましてツーロンに待機してゐたのであります。ナポレオンはこのフランス唯一の司令官であつたラトウーシュをして艦隊を率ゐて密にツーロンを脱出せしめ、隨時ドーヴアー海峽に出で、ブレスト附近を封鎖してゐる英國艦隊を擊破して制海權を握るといふ方策を建てましたが、遺憾ながらこのナポレオンの信任厚かつたラトウーシュは一八〇四年八月に死んでしまつたのであります。このことはナポレオンの對英作戰に殆ど致命的打擊を與へました。このためナポレオンは計畫を變更せねばならなくなり、一八〇五年の春に新しい計畫を樹てまして、ラトウーシュの後任には適當の人なく止むなくロシュフォールの司令官ヴイルヌーヴといふ、後にトラファルガルに於てネルソンに破られた提督を起用することゝなりました。

一八〇五年春の新しい計畫では、ツーロン艦隊とブレストに封鎖されてゐる大西洋艦隊を密に脱出させて、西印度の英領殖民地を衝くが如くみせかけ、ネルソンやその他の英國艦が周章てて追つて來るのを待つて途中で英艦を捲き、逆にどつとドーヴアー海峽に歸つて來て英本國を攻める——といふ方針でした。ツーロン艦隊は三月末にうまく脱出し、ナポレオンは再びエヂプトに行くやうにもみせかけ、又イタリヤの南部を通りマルタ島を攻めるやうにもみせかけて、ネルソンがそら行つた！　といふ時にジブラルタルを拔けて西印度に行つたのであります。一方ブレストの艦隊は非常に好都合な時期であつたにも拘らず、遂に脱出の機會を失つてしまつたのであります。ツーロン艦隊は途中スペイン艦隊と合し、西印度諸島に示威運動をやりましてドーヴアー海峽に歸つて來たのであります。ナポレオンは四月初めにイタリヤに行き、ミラノでイタリヤ王の王冠を戴いたりして計畫を極力カムフラージュするに努めました。ネルソンはナポレオンの考へた通り遲れて西印度にツーロン艦隊を追ひかけて行つたのでありますが、ツーロン艦隊はうまくネルソンの艦隊を捲いて逃げて來たのであります。それを知つたナポレオンは「我が事成れり！」と七月初めにイタリヤを發つてドーヴアー海峽に行き、今か今かとフランス艦隊の來るのを待つてゐたのであります。併しナポレオンの大なる期待に反し、ツーロン艦隊司令官のヴイルヌーヴは凡庸の將であり、而も長年に亙つてツーロン艦隊は封鎖されてゐたので訓練その他充分でなかつたのであります。そしてネルソンを捲いて北上中、英國の通報艦が見付け周章ててロンドンに急報したので、英國では大いに驚き直ちに一艦隊を編成してこのツーロン艦隊を邀擊したのであります。ところがヴイルヌーヴに戰意なく、開戰後大した損害ではなかつたが、ナポレオンの考へに反してドーヴアー海峽には來らず、スペイン北端のコルーニア港に入港してしまひました。ナポレオンは大憤慨し、直ちにヴイルヌーヴにブレストに來るやう再三命令しましたが、ヴイルヌーヴはこれを聞かず更に北上すべきところを反對にスペイン南端のカヂス港に逃込んでしまひました。ナポレオンの最も大切な機會は斯くの如くして逸し去つてしまつたのであります。

この當時英國は非常な危機に直面してゐたので、極力ヨーロッパ大陸諸國の買收・

フランスとの離間に努めました。先づ眼をつけたのがオーストリアで、當時オーストリアは大分弱つてゐましたが、ナポレオンがイタリアの王位についたことに對して非常な刺戟を受けましてとうとう蹶起するに至りました。オーストリアの態度が怪しいと睨んだナポレオンはドーヴアー海峽の海上支配はもう駄目だとみてとりまして、心機一轉、英佛海峽に集中してをりました十萬以上の大軍と國内の大軍を集め、オーストリア軍の進入してゐる南獨に對して新しい編成をとつて大進軍を開始したのであります。これが近代用兵術の或る意味に於ての發足點であります。

オーストリア軍の司令官マック大將はロシア軍の來援を待たず九月三日進んで南獨バヴアリアのウルムに入りました。ナポレオンは咄嗟にこのウルム包圍作戰を採り强行軍を重ねる一方、オーストリア軍とロシア軍の連絡を斷つ等周到且つ大膽迅速な大迂回運動を以てウルムに於けるオーストリア軍を全く包圍し、五日にしてマック大將以下全部を降伏させウィーンに入つたのです。

一八〇五年十一月廿八日ナポレオンはウィーンの北方約百キロの地點にあるアウステルリッツにフランス主力を集結せしめました。オーストリア・ロシアの聯合軍との決戰は刻々迫つて來た。ナポレオンの作戰は、右翼を故意に薄弱にみせかけて、墺露聯合軍の戰線が延びて手薄となつた時に一氣に中央を突破し、兩軍の連絡を斷つて個々を擊破するにあつたのであります。この作戰は見事に奏效して、十二月二日ナポレオンはオーストリアとロシアの聯合軍を擊破して大勝を得ました。聯合軍は八萬六千、ナポレオン軍は七萬三千であります。

この敗戰によりオーストリアのフランシス二世はナポレオンに休戰を請ひ十二月廿六日プレスブルグの條約となつて平和を結ぶのであります。

茲に重大なことはウルムの大捷後二日目十月廿一日トラフアルガルに於てフランスのツーロン艦隊がネルソンに徹底的に叩きつけられたことであります。この時ネルソンの英艦隊は二十七隻、ヴイルヌーヴのフランス・スペイン聯合艦隊は三十四隻でしたが、このうち擊沈捕獲されたもの二十三隻、ヴイルヌーヴも捕虜になつたやうな始末で、これで制海權は完全に英國に奪はれてしまつたのであります。

アウステルリッツの戰果とトラフアルガルの戰果の價値を强ひて比較する事は無理でありますが……陸戰に於てはフランスが壓倒的に勝ち海戰に於ては英國が絶對的に制海權を獲得した譯でありまして、どちらも非常に大きなものであります。アウステルリッツに於けるナポレオンの大勝は、對佛歐洲同盟を牛耳つてナポレオンに對抗して來た英宰相ピットをして「そのヨーロッパの地圖を卷いてしまへ！ 今後十年間は再び地圖をみる必要はなくなつた！」との悲痛な言葉を言はしめた程の效果があつたのであります。事實ウォーターローの會戰はこれから十年の後であります。主に英國から學んでゐる學者や海軍の方ではトラフアルガルの勝利に比すればアウステルリッツの勝利の方が小さいやうに考へてゐる向きもありますが、ドイツの學者等はこのアウステルリッツの戰果を非常に大きく見てをります。アウステルリッツの敗戰によつて英國側の受けた精神的打擊は非常なものでありまして、ピットもこの敗戰の結果自分の經營した大同盟の全く破壞されたのをみて、憤激と絶望の餘り病弱な體を急激に惡化させ、翌一八〇六年一月廿三日遂に死んでしまひ、その後繼はナポレオンの崇拜

者にして常にピットの主戰主義に反對してゐたフォックスを外相としたグレンヴィル卿內閣になります。

この內閣は前のピット內閣と違ひ、親佛的傾向を持つてゐたので、ナポレオンはこのフォックスとの平和交渉のために曩に大陸に於ける英國の策源地であつた英領ハノーヴアをプロシャにやると約束してをりましたが、突然その約束を蹂躙して英國に還付しようとしたので、プロシャも憤激し、遂に決斷力に乏しい國王フリードリッヒ・ウイルヘルムも意を決して一八〇六年九月フランスに宣戰をしたので、ナポレオンとしては、必ずしも希望しなかつたがプロシャに對して戰爭を開始したのであります。

ザールフエルトでプロシャ軍を擊破し、續いて十月十四日イエナの大戰で大勝利を得ました。この大戰はプロシャ軍五萬に對してナポレオン軍は十二萬の壓倒的優勢でした。そしてこの日ナポレオンの部下ダヴー將軍の率ゐる別働隊がアウエルシユテットに於て退却中の敵の主力を破りました。ナポレオンは有名なる大追擊を敢行してプロシャ軍を殆ど潰滅に陷れ、イエナ大勝利より十三日後の十月廿七日にナポレオンはベ

ルリンに入城しました。

五

この頃英國のフランスに對する態度は次第に硬化して參りましたので、ナポレオンは一八〇六年十一月廿一日、シャロッテンブルグ城に於て全ヨーロッパに對し對英大陸封鎖令を宣布しました。ナポレオンは即ち「陸を以て海を制せん」とフランスの支配下にあるヨーロッパ諸國の港灣を英國の通商に對して悉く封鎖したのであります。爾後これがナポレオンの對英戰爭の根幹になる譯であります。

ナポレオンは大陸封鎖令を出しましてから今のポーランドに兵を進めてプロシヤを討ちました。プロシヤは破つたがロシアが頑强に抵抗するので、一八〇七年一月一日ナポレオンはワルソーに入り、ワルソーの北方に冬營いたします。ナポレオンは此處で決戰戰爭と違つた非常に悲慘な經驗をしてゐます。あの不毛の東プロシヤに入つて後、軍隊は非常に苦しみまして一八〇七年二月九日アイロウに於ける普露兩軍との戰

鬪では殆んど敗北してゐたのでありますが、幸ひロシアが逃げてゐたのでよかつたのでありまして、嚴寒の候ではあり非常な損害を受けたのであります。

一八〇七年の六月にフリードランドでロシア軍に大打擊を與へてチルジットの和議となり、ロシアと共同して對英封鎖をやり、同時にロシアと提携してナポレオンのかねての希望である印度方面に進出しまして英國殖民地の崩壞を齎さう、これで對英戰爭の結末をつけようといふ方針になつたのでありますが、ナポレオンとしても非常に苦しい立場にありました。元來、英國は經濟上ヨーロッパ大陸諸國の敵であります。大陸に先んじて政治革命を終り產業革命を終つた英國は輕工業において大陸經濟を壓迫してゐます。のみならず世界政策・殖民地政策で十八世紀に非常な成功をしてをりその殖民地の香料とか砂糖とかいふものを大陸に押賣りする極端な片貿易狀況でありましたから、ヨーロッパ諸國は英國の經濟支配に憤慨し困つてゐた譯であります。それ故に、若し本當にこのヨーロッパ大陸のいはゆる經濟一體化を圖つて英國に對抗し得る狀況に置いたならば、非常に合理的な戰爭が出來た譯でありますが、ナポレオンは

卑近な例で云へば成金者ですから、人氣をとることが第一であります。で、パリジャンの喝采を拍するためにいけないと思ひながらも、當然自分と味方でなければならないところのヨーロッパ大陸に對して反民族協和的な帝國主義的搾取的政策をとらなければならぬ狀況にあつたのです。困難を知つてゐたがさういふ關係で結局ヨーロッパを全部敵として戰ふといふ狀態になりました。戰爭の前途樂觀すべからず、どうかして早く戰爭を解決しなければならぬので、結局封鎖に價値のあるスペイン・ポルトガルを手に入れようといふことになりました。ナポレオンはスペインに對しては軍事的には問題にしてゐなかつたのであります。この日支事變以前に日本が支那の武力に對して關心が薄かつたらうと思ひますが、それ以上にナポレオンはスペインを馬鹿にしてゐたのであります。そのスペインに兵を持つて行くには不安な東ヨーロッパの形勢を緩和しなければいけませぬから、一八〇八年にロシアのアレキサンダーと手を握らうとしてエルフルトの會見となつたのでありますが、ナポレオンの思ふやうには成功しなかつたのであります。その大きな原困は、既に苦しくなつたフランス人がナポレオ

ンの雄大な對英戰爭の本質を諒解出來なくて、タレーランやフーシェ等のフランス政界の中心人物がツアールと通じて反ナポレオン政策をとつてゐたことにあるのであります。ナポレオンの國民統制は既に亂れかけてゐました。さういふ狀況を知つてゐますから、スペインに送つた軍には相當の注意を拂つてゐたにも拘らず、豫期に反してスペインで失敗を招くのであります。熱狂的なスペインの國民性と遊擊戰に適應した山岳地帶の地形、それに海に圍まれてゐますからフランスはピレネー山脈を越えて長距離輸送をしなければならぬのに反して、イギリスは所在に海上輸送して豫期以上の兵力を集中出來ました。これ等がその原因でありますが、ナポレオンの沒落はこのスペインに於ける軍事的不成功が根本的原因なのであります。それ迄はヨーロッパ大陸で戰爭をしましても、戰ひによつて戰ひを培養する——敵國のものを獲り敵國から賠償金を召し上げてやつて行く、といつたやうに戰爭はナポレオンにとつて有望な企業でありました。ところがこのスペインだけは完全な赤字の戰爭になつたのであります。それに乘じて一八〇九年のオーストリアの再蹶起になります。で、スペインの事

半ばにしてとうとう大軍を再びオーストリアに向けなければならなくなりました。この戰では相當苦戰いたしましてレーゲンスブルグで勝利を得、ウイーンを陷れはしたがドナウ河を渡るアスペルンの戰ひではオーストリア軍の戰死二萬四千、フランス軍三萬、而もナポレオンの勇將ランヌもその中の一人であつた如き敗戰を喫し、一度渡つた河を再び渡つて還り、三度渡つて遂にワグラムの勝利をかち得ましたが、ナポレオン自身必ずしも常勝軍ではないといふ體驗をしなければならなかつたのであります。ワグラムの戰勝でナポレオンは平和を結ぶことが出來ましたが、スペインにはいよいよ金を注入しなければならなくなりました。しかし今になつて歷史を回顧すると一八一〇年一一年といふものは英國側も爲替相場は下落するし、食物はなくなつてくるし、大陸封鎖の效果が英國の上に現はれてをつたのであります。英國の歷史家の中にもあの時ナポレオンが食糧の輸出を斷乎として拒んだならば英國は十年か十一年には屈服しなければならなかつただらう、と云つてゐる人があります。あの優れたるナポレオンも經濟のことについてはあの時代の重商主義の觀念を離れることが出來なかつたらしく、ナポレオン自身が親方になつて食料の密輸出をやつたやうであります。うんと英國から金をとつたらそれで參ると思ひ、英國の食料難に乘じて儲けてゐたらしいのであります。ナポレオンは勝利の一歩手前迄來てゐました。英國は乘るか反るかといふことになつて、非常な力で露國に働きかけます。フランス國内でもフーシエやタレーランが策動するし、ナポレオンはツアールとの約束に背いてオルデンブルグ公のエルベ河の地域を回收するといふことになり、ロシアとの關係が惡化して來ました。英國が勝つか、ナポレオンが勝つかの境目であります。

六

私共が軍事的見地より見まして、ナポレオンにスペインに於ける不成功がなく、大軍でドイツを押へ、ロシアに對する斷乎たる態度が十分であつたならば或は勝つたかも知れぬと思ひますが、スペインの不成功でナポレオンの勢力が吸收されたものですから、鼎の輕重を問はれます。その上ツアールが英國と通牒することになりました。云

ふまでもなく、ロシアは穀物を英國に賣つて儲けてゐるので、地主連中が大陸封鎖に不滿な上にナポレオン自身が密輸で儲けてゐるといふのですから、益々承知出來なくなります。ナポレオンとしてはロシアと戰爭して不利益なことを百も承知してゐます。一八〇六年から七年のポーランドや東プロシャに於ける戰爭が如何に困難であつたかを知つてゐますから、戰爭をせずに「コラッ！」と「斷乎外交」「斷乎一蹴外交」で嚇してやつたらツアールも參るだらうと思ひ、「斷乎」「斷乎」でやつてゐるうちに何とも退引ならぬやうになつて、一八一二年の戰爭になつたのであります。ナポレオンは絶對に嫌だつたのですが最早どうにもならなくなつたのであります。しかしいよいよ戰爭になるとロシア遠征の準備は素晴しいものでありました。東プロシャの奥の方に兵隊を集めて一方ロシア軍をワルソーの方に牽制する。ワルソーはロシアの垂涎の地でありますから其處に引つけて置いて東プロシャの方からロシャ軍の背後に一擧に出て來る、といふ方略でありました。この戰略は遂に目的を達せず、ツアールは逃げるのであります。ツアールは、トルストイによれば神の導きによつてやつたのでありま

すが、ナポレオンは國境から遠く出てはいけないと思ひました。連日非常に雨が降りまして雨に濡れた青草を喰ふから馬がばたばた斃れ數日の中に一萬頭も斃死するやうな具合で輜重が續かないのであります。それにこれもトルストイによれば神の導きによつてアレキサンダーは軍隊から離れてペテルブルグに行つてしまひました。アレキサンダーが軍中にゐたなら媾和の氣持になつたかも知れませんが、今はペテルブルグに行つてしまひました。ナポレオンはスモウレンスク以東には斷じて進まぬ肚でありましたが、背後のヨーロッパが怪しくなつてゐる。パリではフーシエ一黨が怪しい。一八〇六年七年の經驗でスモウレンスクを出て行くといふことは殆んど覆滅的危險に遭遇することを百も知つてゐましたがぐづ〳〵すれば國内が危い、乘るか反るかで其處まで行くとナポレオンは其本能的突進性を發揮して最後の博奕でモスコーまで行つたのであります。多くの人は輕はずみで行つたやうに思ふがこれはナポレオンにとつては最も深刻に惱み抜き考へ抜いた結果、對英戰爭の結末をつけるため最後に殘された手段として總てを賭してやつたわけであります。さうして御承知の結果になりまし

た。一八一三年以後の戰爭は殘れた獅子の爭ひであつて、英國側にやられたのであります。しかも一八〇六年イエナでナポレオンに敗れたブリユッヘルの指揮するプロシヤ軍はその後ナポレオンと同じ戰術を使ふやうになりました。敵側もこの革命戰術を體得しましたので、最早段違ひの戰爭は出來なくなりました。ナポレオンの能力も增進して行つたがさうなつたのであります。

フランスは英國との世界政策の爭覇戰において最後に本當に優れた天才ナポレオンを得て、その統率の下に英國との最後の爭覇戰をやるところに來ましたが、遺憾ながらフランス國民はナポレオンを最後まで信賴することが出來ず、ナポレオンを裏切つて永久に英國の風下に立たねばならぬ結果に立到つたのであります。今頃ナポレオン崇拜を幾らやつてもフランスは後の祭であります。

七

今東亞において日本は支那に對して長期戰をやつてゐますが、今申しましたナポレオンの對英戰爭は今次の日支事變と較べて比較的似た戰爭であります。日支事變を古い戰爭に教訓を求めればナポレオンの對英戰爭であり、ナポレオンは日本の立場であります。今度の戰爭も、その智腦的敵は英國であります。英國は實力を持たないかはりに旨く外力を使ふ。さうしてナポレオンに對するヨーロッパ大陸に支那が使はれてゐるのであります。申上げる迄もなくあの歐米の搾取經濟から日支共に救はれなければならぬといふことはわかりきつたことであります。又日本の東亞新秩序建設の一つの目標はあの停頓してゐる支那の社會的情勢を打破つて、本當に新しい政治革命を完成させてやらうといふことであります。丁度ナポレオンの、フランスによつて封建の重壓下にある大陸を經濟的に思想的に政治的に救つてやらうといふ氣持と同じものを我々は支那に向つて持つてゐるのであります。ヨーロッパ大陸はナポレオンにとつて味方であるべきものだつた、丁度それと同じに日本は味方であるべきものを叩いてゐるのでありまして、これはナポレオンと同じ經路ふんでゐるのであります。殊に今度の歐洲戰爭の狀況が日英事を構へるといふやうな狀況になつて行くとしたならば、英

國が支那をナポレオンに對するスペインのやうに使ふために極力努力することは明瞭であります。即ちいざとなれば日本の勢力を支那大陸に深く吹込まうといふことに更に惡辣な努力を拂つて行くことは明瞭であります。そして、ナポレオンに對してロシアを使つたやうに、ソ聯邦の巨大な陸軍やアメリカの海軍を使はうといふのが、自然の勢ひであらうと思ひます。

この見地から見て、日支事變は百年前のナポレオンの戰爭に比較してそれと似た態勢をとつてゐるのであります。しかし、日本はフランスではありませぬ。天皇を中心として億兆一心、最後迄團結を守つて行く國でありますから、ナポレオンを裏切つたフランスと同樣にはゆきませぬ。軍事的に言つても、ロシアのスチームローラーを押さへるためにナポレオンの考へた同盟とは違ひまして、確乎たる滿洲國との同盟を持つてゐます。滿洲國の軍事的位置といふものは非常に立派な位置を占めてゐるのであります。それで私共は夢さらさら英國を首腦とする日本に對する戰爭によつてナポレオンのやうな失敗を見ようといふことはありませぬが、戰の本質そのものは似てゐるといふことをお考へになつて、日本の戰爭を指導して行く見地から言つて幾多參考にしなければならぬ點があると思ひます。

八

最後にナポレオン戰爭以後の英國の狀況を軍事的に簡單に觀てみますと、ナポレオンの沒落、云ひ換へればフランスの失脚といふことによりまして、英國は約百年の本當に一番華の時代を迎へたのであります。十九世紀は英國の一番立派な時代で、ヨーロッパに敵なしでありました。それで考へて頂かなければならないのは、英國は斷然たる海軍を西大西洋に持つてゐたといふことであります。敵はヨーロッパしかありませぬから、ヨーロッパの强國から殖民地に行くには英國の前を船で行かなければならない。其處をうまく押さへれば世界に於ける殖民地は全部英國の支配下にあつたのであります。其上大陸ではフランス・ドイツ・オーストリアを爭はして居れば、此上なく安泰であつたのであります。さういふ軍事的に優れた位置にあつたため、所謂海主陸

從の國防的に有利な態勢の下に百年間の太平を夢見て居つたのでありますが、十九世紀の末葉、ロシアが強くなつて海によらずして印度に出よう極東に出ようといふことで、英國の重大な利益地域はロシアの壓迫を受けましたから、日本を番犬に使つて極東及印度を防衛する態勢をとつたのであります。かくて段々英國の世界制覇に罅が入りかけて來た時に起つた問題は近世ドイツの勃興であります。三B政策、即ちその大陸から埃及を衝かう印度を衝かうといふ政策であります。ナポレオン歿後、初めて大きな敵を英國は發見したわけであります。

ドイツの今日あるはナポレオンのお蔭であると常に私は云ふのであります。ナポレオンが現れる迄は千以上の行政國家にわかれて居つた。ナポレオンは封建制を破壞し世界主義によつて、ドイツ國民を救はうとしたのですから、ナポレオンの沒落時には千から五十以下となつたのであります。今日のドイツ民族の復興に對してはナポレオンに對して感謝をしなければならぬものがあると思ひます。それが段々力を持つて來て、カイゼルは英國に對する海軍を造るといふことになり、それが大問題になつて來

ました。それ迄ドイツの連中はナポレオンを名譽心の權化たる暴君と信じて居りました。ナポレオン崇拜者は暴君とのゝしりながら其力に惚れ込んで居たのであります。然るに十九世紀末、即ち獨逸が英國と世界政策を爭ふことになつてからは、心からナポレオンの行爲を是認し全面的に讃美することゝなり、歐洲大戰前獨逸に於けるナポレオンの研究・崇拜はフランスを凌ぐ狀態でありました。私も歐洲戰爭については少し勉强しましたが、日本人はどうしても主に英語で勉强しますから殆んど英國流に考へて居つたのであります。更にヒトラーの言ふ通り宣傳力にかけては素晴らしい英國であります。いけないと思ひ乍らやられて仕舞ふ。米國のドイツに對する宣戰の原因となつたルシタニア號の沈沒事件、あれは今日アメリカの有識階級の間では英國の潛水艦がやつたことと相當廣く信ぜられてゐると言はれてゐます。本當かどうか知りませぬが、宣傳力は非常なものです。ヨーロッパの連中は日本を英國の半屬國と思つて居ました。嘗て私がジュネーヴの聯盟總會の歸りにドイツ人の友人に會ひましたら、私の手を固く握つて「貴樣今度こそ日本は英國から獨立したなア」……かういふ調子

で日本は英國に楯つけると思つてゐなかつたのであります。さういふ關係で過去のヨーロッパ戰爭の責任はドイッにあるやうに思つてゐるが、ドイッにもイギリスにも積極的に戰をやらうといふ政治家は歐洲戰爭時代にはなく兩方共回避しようとしたが、寧ろ私は、のびのびになると新興ドイッに有利でありますから、聰明な英國側から第一次ヨーロッパ大戰に於ける積極的に働きかける氣分があつたものと思ひます。さうしてナポレオン時代英國の敵であつたフランスをお伴につれて、實は一番の犧牲をそちらに拂はせて、ヨーロッパに於ける最後の敵であるドイッをやつつけたのが第一次歐洲戰爭であります。

ドイッ人はフランスが敵でないことを皆知つてゐる、フランス人もわかつてゐる。かつてはゐるが英國の何といふか政治的魅力といふか、それが素晴しいのであります。歐洲戰爭後はフランスが威張り出したのでドイッを使ひました。一九二二年のルールの出兵、これは英國がフランスをたきつけてやらせておき乍ら、ドイッに行つてはどうもフランスのやり方は酷い、酷いが條約があるから何とも出來なかつた、同情は十分持つてゐると色氣たつぷりにやつてゐる、これは私は間違ひないと思ひます。ところがこれだけ惡辣な英國も第一次歐洲戰爭以後初めて救ふべからざる頽勢になつて來たのであります。何故か？　それはアメリカと日本の勃興であります。これは幾ら小刀細工をやつても駄目で、歐洲戰爭以後英帝國は崩壞史の本論に入つたわけであります。カナダに領地を持つてゐますが軍事的に云へば英國のものではありませぬ。これは米國の武力の支配下にあります。濠洲・シンガポール以東は日本の武力の支配下にあります。軍事的に見て印度は日本とソ聯邦の武力、アラビヤ附近はソ聯邦の武力支配下にあつて、防衛は困難であります。本當に英國海軍によつて支配し得るものは大體アフリカだけしかないと思ひます。英國はベルギー・オランダ等と同樣に實力以上の尨大なる領土を持つてゐるのであります。これは歴史的惰性と外交上の驅引によつて惰性的に地位を保つてゐるだけで、實力的には英帝國は崩壞してゐるのが今日の狀態であります。

九

もう一つ、今度のヨーロッパ戰爭について軍事的にはどういふ風になるかを少し附言したいと思ひます。

第一にこれは持久戰爭だと思ひます。空軍を遠慮して本當の軍事目標に對する以外使はないのでありますが、本當に空軍によつて戰を決し得るならばロンドン・ベルリンはガチャガチャになつてゐる筈ですが、それだけの自信がないからお互に政策を中心にして極力避けてゐます。恐らくこれを以て見ても長期戰になる可能性を備へて持久戰爭の領域を越えることはないと思ひます。持久戰爭をやめて決戰戰爭をやるにはマジノやジーグフリードの陣地を新式兵器をもつて突破出來るか出來ないかにかかつてゐます。私は出來まいと思ひます。空軍も同じに見てゐますが、本當にパリ・ロンドン・ベルリンをやれるやうになつたら決戰戰爭になります。ジーグフリードかマジノを蹂躙されることになれば、決戰戰爭になる可能性があるが、これは相當困難で、さうだとすれば大體ベルギー・オランダからライン河西側の線で戰爭は膠着狀態になり、さうして經濟戰になります。ポーランド・ルーマニア・トルコ等の國は愚圖々々

したらドイツ側のために蹂躙せられることを考へなければならぬ、でありますからドイツ側はライン以東の地區の經濟力によつて戰爭が持久出來るわけであります。言ひ換へれば過去の第一次大戰に比べてドイツは極めて有利な位置にあり、特に永年統制經濟の訓練に慣れて居りますから、ドイツが直ぐ負けると考へるのは間違ひであらうと思ひます。

さうなつて來ると、この持久戰爭で問題はイタリーとスペインの向背であります。イタリーがドイツ側につけば地中海の交通は大體ドイツ側の支配になりませう。スペインがドイツ側についたならばこれは非常に危いことを惹起します。即ちスペインに於ける空軍及び潛水艦の根據地は英國の死命を完全に制してしまふと思ひます。英國の開戰はイタリーやスペインは大體大丈夫だらうといふ見當か、或は若しイタリーやスペインが參戰しましても、少くともスペインだけは英佛軍によつて迅速に占領出來るといふ自信のもとに行はれたものと思はれます。此處にイタリーが蹶起するかしないかといふデリケートな問題が入つてゐます。イタリー・スペインが參戰したら、フ

ランスはマジノの要塞を押さへて主作戰をスペインに向けませうが、フランス側がスペインを奪取出來なかつたら致命的打擊を受けます。勝てばモロッコ迄のびて、そこで東西挾んでの持久戰爭になります。かうなるとドイツの潛水艦も質はいゝのですが數が少いから後方攪亂も十分でなく、他方ドイツ側のソ聯邦を背景とした持久力も相當でありますから戰ひは相當に長くなります。かうしてヨーロッパの自滅になる戰を始めてゐるやうに思ひます。尤も空軍がどうなるか、スペインの軍事上の條件がどうなるかといふことは經濟のやうに或線を歩んで行くのと違ひまして博奕でありますから果してどうなるか適確にはわかりませぬが、御參考にもなることもあるかと思ひます。

（昭和十四年九月十一日講演）

昭和十五年四月十五日初版發行
昭和十六年一月二十日再版發行

ナポレオンの對英戰爭奧附
〔定價金二十錢〕

著者　石原莞爾

發行者　東京市麻布區櫻田町八番地
東亞聯盟協會
代表者　木村武雄

印刷者　東京市芝區南佐久間町一ノ七
中川二郎

發行所　東京市麻布區櫻田町八番地
電話赤坂(48)三三八三番
振替口座東京一六五三四三番
東亞聯盟協會

版權所有

414
248

東亞聯盟協會刊行並取扱物

昭和維新論
東亞聯盟協會編・價三十錢
四六判四四頁・送料三錢

東亞聯盟建設要綱
東亞聯盟協會編・價五十錢
四六判一二〇頁・送料三錢

支那事變解決の根本策
東亞聯盟協會編・價五十錢
四六判一二〇頁・送料三錢

東亞聯盟と昭和の民
小泉菊枝著・價五十錢
四六判七四頁・送料三錢

東亞聯盟とは何か
東亞聯盟協會編・價五錢
四六判一〇〇・送料三錢

東亞聯盟論
宮崎正義著・價一圓五十錢
四六判三九〇頁・送料十錢

東亞聯盟への途
中山優著・價三十錢
菊判半切九二頁・送料三錢

新民精神的三民主義
繆斌著・價五十五錢
四六判一四〇頁・送料三錢

世界最終戰論
石原莞爾述・價四十錢
四六判八八頁・送料三錢

月刊・華文「東亞聯盟」
中國東亞聯盟協會發行
四六倍判・價四十錢・送料三錢

東亞聯盟協會發行

定價 ¥.20